おとうさんの旗を

丸川栄子 作　岩淵慶造 絵

NDC 913　　8093—06955—7159
172ページ　22cm　950円

おとうさんの旗を

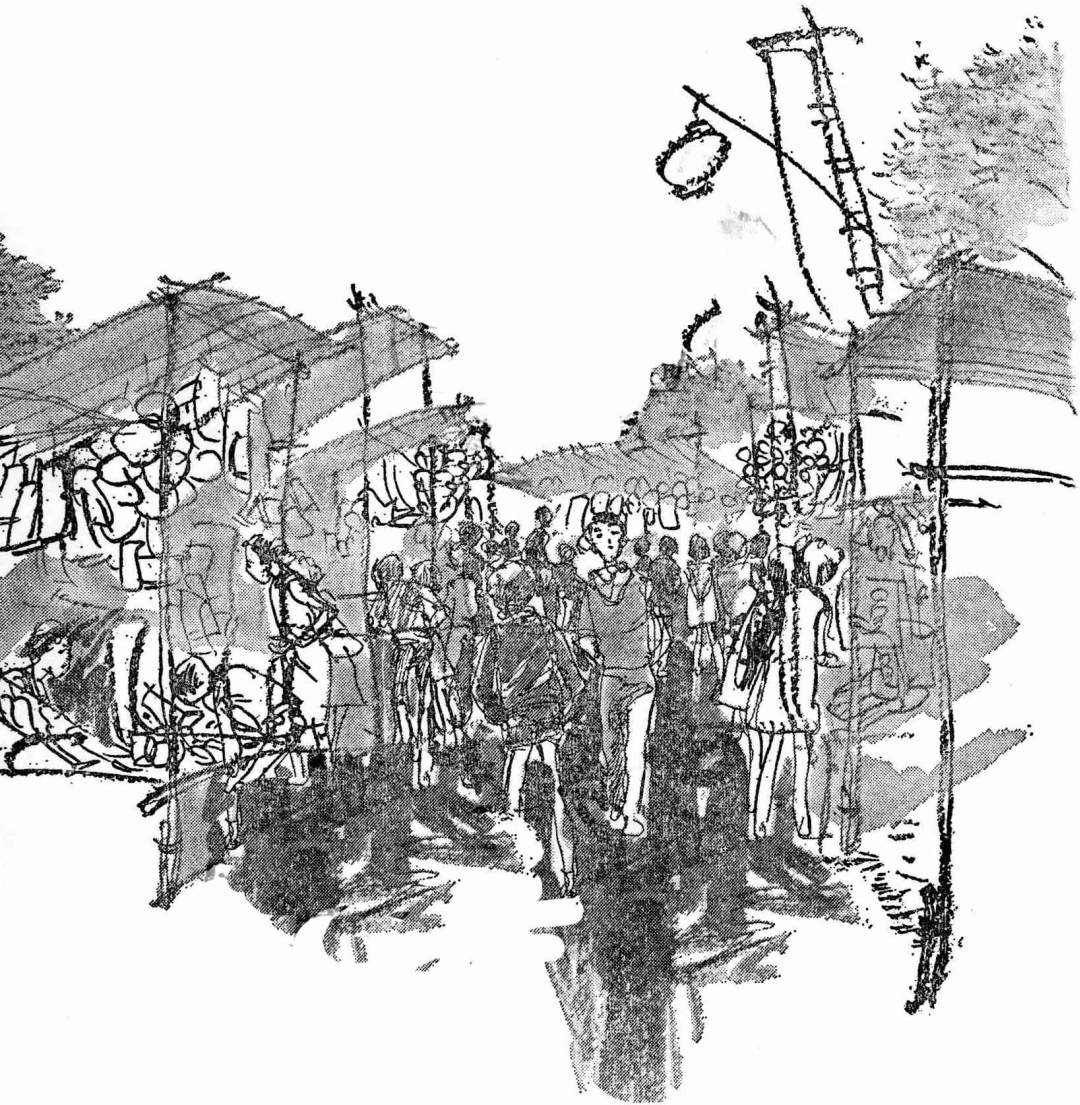
昭和55年1月29日　第1刷

著者　丸川栄子
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
〒601 京都市南区西九条北ノ内町11
電話 075(681)4431〈代表〉
印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　和田製本工業株式会社
©1980 Eiko Marukawa. Printed in Japan

乱丁・落丁本はご面倒ですが弊所出版部宛お送り下さい。送料弊所負担にてお取り替え致します。

おとうさんの旗を

丸川栄子 作　岩淵慶造 絵



日本財団支援

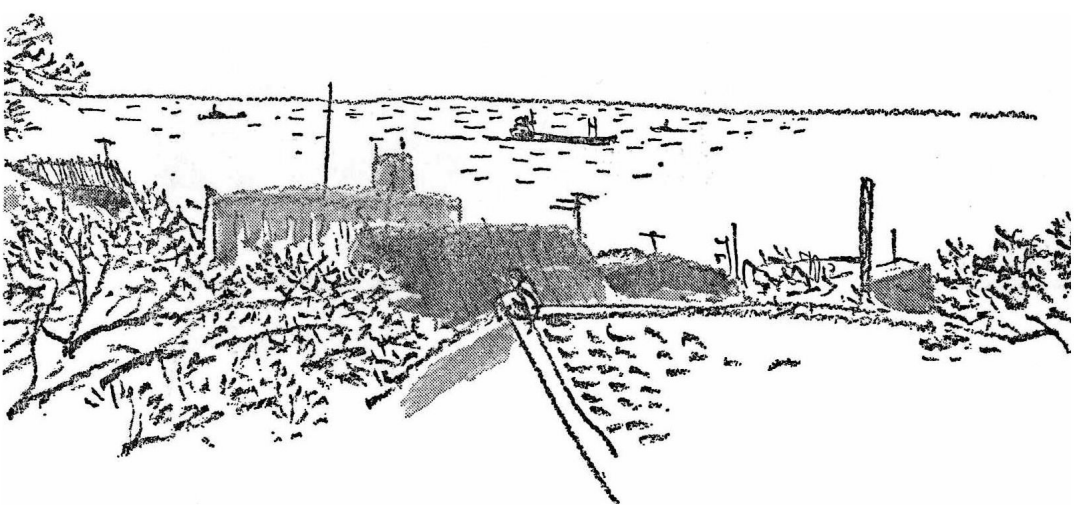
笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

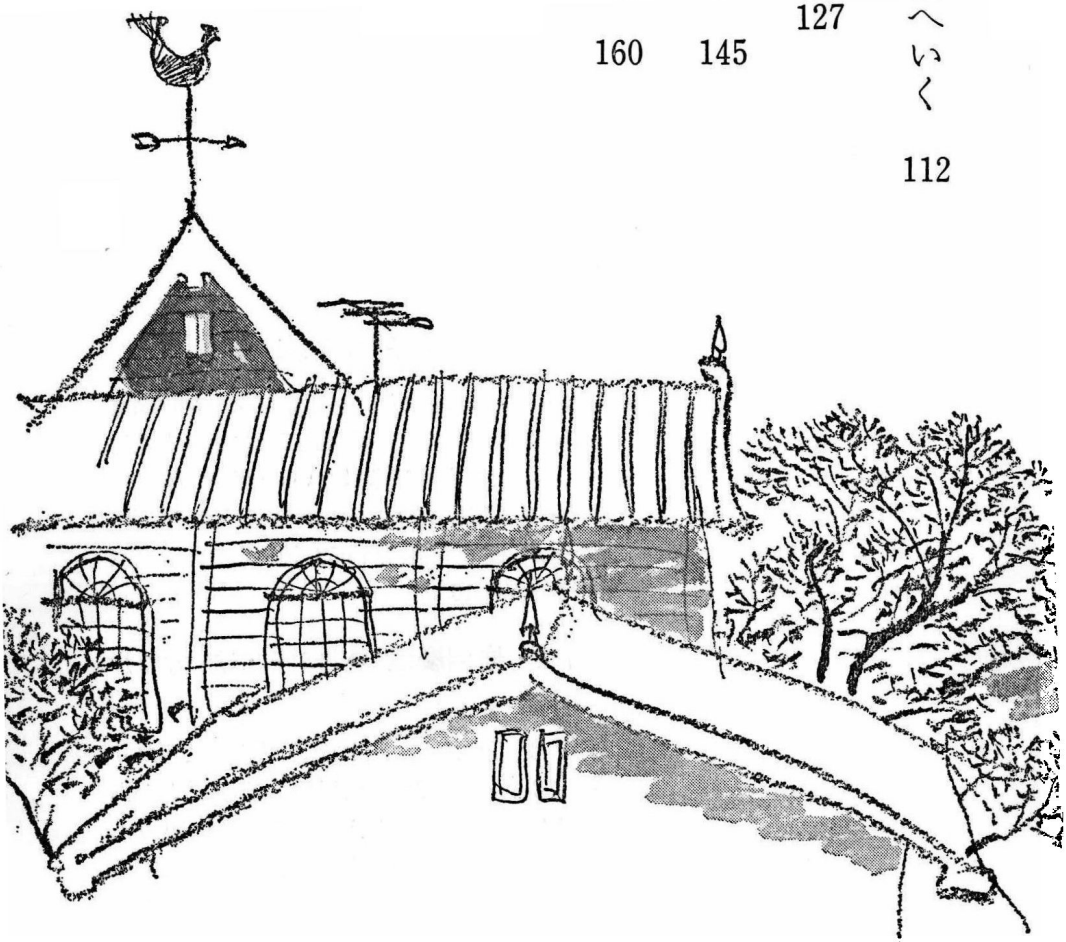
もくじ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　田中先生のクラスになった　8
二　へんなバアさんやな　19
三　屋根にのぼる　31
四　夏祭り　51
五　タイ焼食べとくれ　63
六　おばあさんの息子　78
七　リレー選手をえらんだ日　99



八　自動車学校へいく　112
九　夜の火事　127
十　もうすぐ春　145
十一　最後の授業　160



著者・**丸川栄子**(まるかわ・えいこ)

1926年神戸市生まれ。兵庫県立第一神戸高女高等科国文科卒業。平塚武二氏に指導を受ける。著書に「もう戦争はない」「児童公園はできた」(以上国土社)「海の子の家」(小峰書店)などがある。現住所〒653 神戸市長田区前原町1—7—10

画家・**岩淵慶造**(いわぶち・けいぞう)

1942年引前市生まれ。亜細亜大学商学部卒業。作品は「五つぶのエンドウ豆」「あのころフリードリッヒがいた」「台風岬の子ら」「おかあさんは白雪ひめ」「かえってきたサケ」「りんごになった茂くん」「少年ヤポルの島」など多数。現住所〒156 東京都世田谷区上北沢1—18—304。

おとうさんの旗を

一　田中先生のクラスになった

橋本登は、きょうから四年生だ。
始業式のあと、組わけがあって田中学級になった。
あたらしい教室で、思い思いの席について先生のくるのを待っていると、背のひょろりと高い、若い男の人がぬっとはいってきた。
その人は、だまって教壇にあがると、黒板に大きな字で、

田中一郎

と書いた。そして、みんなの顔を見まわすと、
「ぼくは、田中一郎です。きょうから、君たちのクラスを持つことになりまし

た。よろしく。」
といった。とっても大きな声だった。
それから、
「はやく、君たちの顔と名まえをおぼえたいから、自己紹介してもらう。ただ名まえをきいただけではおぼえにくいから、自分の得意なことか、好きなことを、つけくわえていってもらう。いいな。」
といった。するとだれかが、
「先生は、なにが得意なんですか?」
と、たずねた。
「そうだなあ。」
先生は、ちょっと首をかしげて考えていたが、
「ぼくは、スキーが得意な田中一郎です。」
と、大きな声でいった。
みんな、ワァーッと笑った。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

登は、心のなかで、
（おとうちゃんと同じや！）
と叫んだ。
登のおとうさんは、登が三つ、妹の圭子は、まだ誕生日がこないときに、交通事故で亡くなったのだ。だから、おとうさんのことは、おぼえていないのだけれど、おかあさんからよくきいている。
背が高くて、やさしくて、声が大きくて、山のぼりとスキーが得意で……。おまけに名まえが、一郎だ。
（先生は、おとうちゃんと同じや！）
うれしさでふくれあがった登の心は、
「では、こんどは君たちの番だ。じゃ、そこから順に。」
という田中先生の言葉で、いっぺんにしぼんでしまった。
登は、人の前で話をするのが苦手なのだ。ことに、教室のなかがだめなのだ。
最初にあてられた男の子は、

「野球の好きな、金子昭夫です。」
と、元気よく答えた。
「よし、野球チームをつくろうな。」
田中先生は、昭夫に笑いかけると、開いたノートに書きこんだ。
登は、はっきり話のできる昭夫がうらやましかった。
つづいて、隣が立った。
「ぼくは、虫が好きな野中和也です。いま、カブト虫を飼っています。」
「それはいい。飼育日記をつけてごらん。たのしいよ。」
「私は、絵が好きな春木美香です。」
「私は、――」
「ぼくは、――」
つぎつぎ答えていくのをききながら、登は、
(なんで、あんなにうまくいえるんやろ?)
と、感心する。

先生は、あいづちをうったり、笑ったりしながら、ノートに書きいれている。
だんだん、登の順番が近づいてきた。
（どうしよう、どうしよう。）
登は、おちつきなく、手を組んだりほどいたり、お尻をもぞもぞさせたりしていた。
隣の今井吾郎の番になった。
吾郎は、サッと立ちあがると、大きな声で、
「ぼくは、自動車が大好きな今井吾郎です。」
といった。
田中先生は、笑いながら、
「暴走族は、やめといてくれよ。」
といった。
「ハイ、だいじょうぶです。」
「よし、ではつぎ。」

登は、先生に声をかけられて立ちあがろうとしたが、イスの足が机にひっかかって、そのはずみで、ドスンと腰をおとしてしまった。

吾郎が、

「なに、あわてとんや。」

といった。

その言葉に、みんながドッと笑った。

登は、それでよけいにあがってしまった。いそいで立ったものの声がでない。顔が真っ赤になるのが自分でもわかる。勇気をふるいおこして、「ぼくは」といおうとしたとき、

「先生、橋本くんは、すごく走りが速いんです。」

と、前の方で女の子の声がした。

登は、びっくりして、目で声の主をさがした。一番前列の女の子の、先生を見あげたおさげ髪が、少しゆれているので、すぐあの子だとわかった。さっき、「絵が好きな……」といった春木美香だ。

美香とは、同じクラスになったことはないけれど、美人で、勉強がよくできて、活発で、男の子の間で人気ナンバーワンの女の子だから登もよく知っている。

田中先生は、登に、

「走りの速い橋本か。運動会にはがんばってくれよ。」

といった。

登は、大きくうなずくと、そっと腰をおろした。わきの下が汗でびっしょりだ。でも、美香が助け舟をだしてくれたのがうれしくて、しぜんとほほがゆるんでくるものだから、じっとうつむいていた。

自己紹介のあと、委員の選挙があった。

登は、さっきのお礼の気持ちもあって、美香に一票いれた。

結果は、野中和也が委員長。美香が副委員長。ほかに、四人委員がきまった。

今井吾郎にも一票あった。

登は、それがふしぎだった。勉強は、登とどっこいどっこいだし、いたずらが

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com